

《目的》従来、味覚・嗜好に影響を及ぼす要因として、性別、年齢、身体状況などが挙げられている。しかし、味覚・嗜好と心理状態の関連についての研究はあまりされていない。そこで、今回は妊婦、学生を対象に、本研究を実施した。

《方法》1990年8月、福岡県久留米市内S病院産婦人科外来の19～42才の妊婦89名(妊婦群)と同病院短大専攻科助産学専攻学生20～30才の22名、同市内S短大食物栄養専攻学生18～20才の94名、計116名(学生群)を対象とした。心理状態の指標として顕在性不安検査(MAS心理テスト)を用いて不安得点検査を行い、同時に東洋ろ紙(株)製の四原味(塩味、酸味、甘味、苦味)の味覚テスト濾紙による味質識別能検査、クエン酸濃度の異なるレモンゼリーによる酸味嗜好検査、食習慣アンケート調査などを実施した。MAS検査において信頼性・妥当性のある回答が得られた、妊婦群72名、学生群67名について、それぞれ不安得点が、0～21を標準群、22以上を高不安群として、比較検討を行った。

《結果》不安得点は、妊婦群は 17.3 ± 8.1 、学生群は 20.7 ± 7.7 で、有意に妊婦群のほうが低かった($p < 0.05$)。妊婦群において、味質識別能は、塩味、酸味とも高不安群のほうが、標準群に比べて、味質を正確に識別する人が、多い傾向にあった。レモンゼリーによる酸味の嗜好は、高不安群・標準群間に有意な差は得られなかった。学生群において、味質識別能・レモンゼリーによる酸味の嗜好は、高不安群・標準群間に有意な差は得られなかった。